

ことばの迷い道

真実はふたつ?

ひごときひさ
肥後 時尚

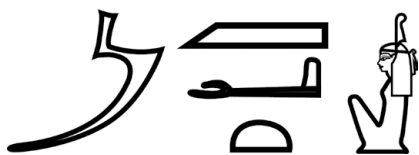
関西大学大学院博士後期課程

古代エジプト人は、「ふたつ」が好きである。彼らは世界が対になるふたつの概念でできていると認識していた。例えば、彼らはエジプトを「ふたつの国」や「ふたつの岸」、「上エジプトと下エジプト」と表現し、世界を東方と西方、現世と死後の世界、昼と夜などの組み合わせでとらえていた。この「ふたつ」へのままたまならないこだわりは、古代エジプト語にもはっきりとあらわれている。英語の名詞には単数形と複数形があるが、古代エジプト語の名詞には単数形と複数形に加えて、物事がふたつあることを示す「双数形」が存在する。先ほどの「ふたつの国」や「ふたつの岸」はこの双数形で示される。

世界をふたつにわけるとらえ方は、一見するとわたしたちにも容易に想像できそうな印象を受ける。しかし、古代エジプト人はわたしたちの常識ではひとつやふたつといった数では計り知れないものまで「ふたつ」でとらえていることがある。その代表的な例が、「真実」の概念である。

古代エジプト語で「真実」や「正義」、「公正」という概念は、「マアト」(ꜥꜣꜣ)とよばれる。マアトは古代エジプトにおいて重要な概念であり、数多くの史料に単数形(ꜥꜣꜣ)で示されている。また、ときには真実や正義を司る女神の姿としてもあらわされる。しかし、有名な「死者の書」の死者の裁判の場面では、どういうわけかマアトは単数形ではなく双数形マアティ(ꜥꜣꜣꜣ)で表現され、真実の女神も二体となってあらわれる。つまり、この場面では真実が「ふたつ」示されているのである。数でとらえる事の難しい抽象概念

でさえもあえて「ふたつ」あると認識した古代エジプト人の感覚は、ただただ不思議でならない。「なぜ真実がふたつあるのか」という謎に対しては、多くの学者が興味を示し、一〇〇年以上も前からさまざまな解釈が提示されてきた。ある人は、「現世の真実」と「死後の世界の真実」であると考へ、また別の学者は太陽と月の隠喩であると考えている。「ふたつの真実」の語は実際には双数形ではなく、ひとつのままと考える学者もいるが、「ふたつの真実」がこぼれただけでなく、二体の女神の画像で描写されていることから、確かに彼らの思想のなかに真実はふたつあったのだろう。残念ながら、この議論は今なお最終的な結論にはいたっていない。先人が示した解釈のなかに答えがあるのかもしれないし、まだわたしたちの知らない深い意味が「ふたつの真実」に隠されているのかもしれない。いずれにせよ、古代エジプト人の「ふたつ」へのこだわりはわたしたちの想像を簡単に超えるものであり、彼らの思想をより正確に理解するための道のりは果てしなく続きそうである。



「真実」(mꜥꜣꜣ/単数形)



「ふたつの真実」(mꜥꜣꜣꜣꜣ/双数形)